

なつた原が確かな演技で、信じ切つて堂々と存在し、くの人に届いてほしい」

九州近代歌謡新聞

…513…

ジャズ編

九州ジャズ史の中で北の公開映画の自主上映会など「コンボ」、南の「パノニカ」と呼ばれる時代があった。福岡市と鹿児島市の両店はジャズ喫茶の草分け的存在だった。

「パノニカ」は中山信一郎が早稲田大学卒業後、1974年に開店した。2000年に閉店、中山は18歳で死去した。中山はた中山について語った。「と

鹿児島の個人音楽事務所「リズムハート」の森田孝一郎(55)は親交の深かつ

た中山について語った。「と

ライブの企画のほかに、未

にかく、面白い人の一語に

尽きます。真面目に悪

好きなことを楽しめ



中山信一郎さん(右)と森田孝一郎さん
=1996年ごろ

けする面白さですかね。そ

× ×

森田は高校時代、ロックバンドを組んでいたが、ジャズ志向もあった。当時、若かったタレントのタモリや漫画家の赤塚不二夫、ジャズピアニストの山下洋輔たちが、ジャズを背景に一緒になつて自由奔放な表現世界を創りだしていた。そこに魅かれた。

森田は鹿児島大学に進学すると迷わずに「ジャズバンド部」に入り、ビッグバンド、コンボでドラムをたいた。実家近くの「パノニカ」にも足しげく通うようになった。

「最初、入るのは怖かつたですね。中山さんはいつもたばこを吸いながらコーヒーを入れていました。中山さん、ジャズを慕う常連客も多かったです」

1990年代に入るとジャズ喫茶の経営も苦しくなつていく。「パノニカ」も例外ではなかった。森田は95年ごろから閉店まで約5年間、ボランティアとして「パノニカ」の経営を強力にサポートした。

「それまでまったくのんびり勘定でした。経理などを含めてチェックし、黒字化するように努力しました」

中山の死後、森田が中心
敬称略
(田代俊一郎)